

いつに在ったことか、Miles Davisを初めて聴いたという事象は。

今し想えば、吃驚するぐらい遅かった。三十に近くなつてからであつたろう。

よくある話だが、なぜそれを聴いたか、憶えていない（小説などでも回想の場面によくあるフレーズ）。

シチュエーション^{だけ}丈だ、脳裡に映像として明晰に遺る記憶は。

自家用車の操縦席、たぶんコンポに繋げた音楽アプリから聴いていたと思うけれども、それまでジャズに興味がなかったが、なぜ、そのとき唐突にチョイスしたか。その記憶がない。

恐らくは、ミュージック・アプリにお任せであつたであろうが、それにしても、何系かくらいは必ず指定するはずで、まったく意に関わらぬものではなかつたと推定されるが、なぜ、その方向へ赴いたかが、一向わからぬ。思い至らぬ。様々に、空想はできるものの、兎にも角にも、それら諸事情の周辺は覚えていないが、明晰判明に憶えている、ただ、ただ、衝撃であつたことは。

曲はシャンソンの名曲『枯葉（仏：Les Feuilles mortes、英：Autumn Leaves）』は多くのジャズ・ミュージシャンにアレンジされ、演奏されているが、マイルスのプレイは絶妙なミュートによる繊細な感情表現で、どんな言葉よりも、緻密に心の襞をトレースし、ダイレクトに気持ちを伝動する。心から心へと直截バイブレーションする。直截 ということ。それ自体。何もない。あらぬ。音の存在は、それゆえ、リアルで、ヴィヴィッドであつた。

言葉がないだけに、むしろ、現実が直截、喰い込んで来るような感覚があつた。音という存在が、現実存在が、何ものも仲介・介在せずに直にImpactする。

言葉や概念などその表現しようとするものそのものではないが、音はいつでもそのもの

だ。音としてしかアピールして来ない、音自体でしかない。素顔しかない。素材^{だけ}丈でしかない。素^すでしかない。それゆえ、ダイレクトだ。由縁^すを介在しない。ガツンとした唐突性の在る衝撃。

いや、人のみならず、動植物や虫や魚介にさえもあたえるであろう。音は物的な現象だから、物的な存在であるから、必ずや。

それは茶陶器など焼き物の景色に通じ、自然の事物・風景の存在の捉えられなさ、多岐複雑微妙繊細精緻細密さに通ずる。

その上に、金管楽器やハモニカなど、金属のリードを持つ楽器の味わいは、また独特なものがある。マイルスのミュータント奏法はそれを明晰にする。

硬質で、無機質、響鳴の抑制された、ものとしての音。ドライでクールだ。存在の無言。存在の無感情、無表情。もしくは時の止まった表情。そこには何もない、リアルで空虚、空絶絶空で、狂裂。それでいて、不可説な抒情が魂魄を奇襲する。筆舌に尽くせぬ狂奔裂。

^{Vibrant} 生へ言語が到達できるものではない、という感想を抱いてしまう人間の感性の構造は、いったい、何ゆえか、いかなうな義があるというか。敢えて、設定する大自然の意向が、神意がわからない。

全ては、ただ、サウンドのヴィヴィッドなインパクトのように、唐突。唐突でしかなく、傍若無人に、意義・意味を無視してゐる。沙漠に在る、古代の遺跡のように黙して、凌儼で、甚だ奥深い。神聖崇高な、聖の聖なる非情性。